

都道府県番号	6
都道府県名	山形県

()

・学校の概要

立川町立立川中学校							
	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数	
学級数	2	3	2	1	8	16	
生徒数	66	86	78	2	232		

・実践研究の概要

<p>・主題（テーマ）</p> <p style="text-align: center;">確かな学びをはぐくむ学校づくり 学びを通して人を育て、高い学力の学校をめざす</p>

・実践研究の内容について

TTから習熟の程度に応じた少人数学習へ

1 ねらい

これまで実際に授業をしながら、生徒の実態を把握し、生徒に身に付けさせるべき課題は何かということを見いだそうと努めてきました。その結果、学ぼうとする意欲と基礎・基本を身に付けさせることが大事と考え、これまでの指導を見直し授業の改善に取り組み、時代や社会の求めに応じた子どもたちを育てるために、可能な限りこれまでの一斉指導からTTへ、そしてTTから習熟度別学習を行うことにしました。

本校では、平成13年度から全学年で数学をTTで行ってきましたが、次の点が明らかになりました。

- 生徒一人ひとりをより適切に支援・評価できる。
- 生徒の考えを大切に指導の展開ができる。
- 数学の学習、指導を効果的にできる。

これらの成果を踏まえ、さらに今年度6月からは、習熟度別に少人数クラスを編成しました。そして、習熟度別学習を通してどのような能力を育てるか、次の二点に絞りました。

やればできることや分かる喜びを味わわせ、学習は楽しいという体験を通して、生徒一人一人に学習意欲を持たせる。

生徒の学習を見守り、分かり方に気付かせ、必要なときに手助けし、全ての生徒が基礎・基本を身に付けることができる環境を創る。

また、指導に当たっては次の事に配慮しました。

- 生徒の習熟度に応じた学習により、生徒の理解しようとする意欲や向上心を高める。
- 生徒一人ひとりが発表したり、自分で表現する場面を増やす。
- 人数が少ないことから気軽な気持ちで質問ができ、より確かな学びをはぐくむ。

上記のように、これまでの取り組みと今後生徒につけたい力を踏まえ、本校では平成14年度から、学びを通して人を育て、確かな学力が身につく学校をめざし、一斉指導、個別指導、TTによる指導、習熟度別学習による指導等の効果的な使い分けを探りながら、教師自身の教える工夫を深め教える意欲を高めたいと考えています。



2 実践例

(1) 「確かな学力」を保障する指導体制の工夫

生徒と教師、生徒と生徒の心を深め合い、きちんとした学習規律や学習習慣を身に付けさせ、一人一人がわかる指導を仕組むことを学校研究のねらいの一つとして全体で取り組んでいます。(確かな学びをはぐくむ学校研究における仮説の一つに設定しています)

教育課程上で、全学年、国語、数学、英語の基礎・基本に関する内容を学習する時間を毎日15分程度をチャレンジタイムとして確保しています。

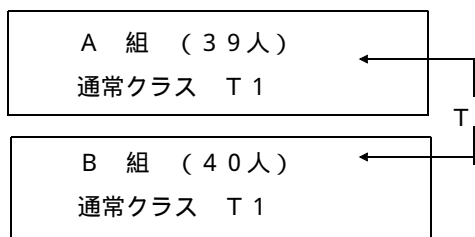
同一学級内での複数教員による指導（TT）（1年英語、全学年数学）や学級の枠を超えて、習熟の程度や興味・関心などに応じて少人数の学習集団を編成し指導しています。（3年数学）

（2）習熟の程度に応じた少人数学習（3年数学）

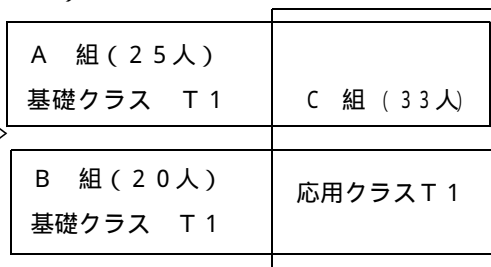
平成14年度、1・2年生の数学は1クラスあたり週2/3時間を2人の教師でTTを実施しました。4月当初、3年生の数学2クラスは、全ての授業を3人の教師でTTを行いました。ところが3年生、1クラスの人数がA組が39名・B組が40名と大変多く、なかなかきめ細かな指導が届きにくい状況でした。この状況を改善するために3人で行うTTの指導形態を変え、クラスを三つに増やし習熟の程度に応じた少人数学習へ移行しました。

4月当初は、生活集団の確立を目指し、通常のクラスのままTTによる授業を行い、T2が2つの教室を行き来するようにしていました（図1）。1学期末のテスト後（6月）からは2クラスを3クラス（図2 基礎クラスを2コース、応用クラスを1コース）に編成し、習熟度別による少人数クラスで授業を行い現在に至っています。編成は次のように行いました。

（図1）4月当初のTTによる指導



（図2）1学期末からの習熟度別学習による指導



クラス編成は生徒から希望を取って決め、場合によっては面談によって、自分の実力にあったクラス選択が出来るように配慮しました。また、クラスは単元の終了を目処に再編成することから、クラス分けそのものが生徒の励みにもなっていたようです。

（3）習熟度別学習による指導で配慮したこと

本校の習熟度別学習は、ある内容を学ぶのに三つの授業を用意し、その中から自分が理解しやすいと思う授業を選んで学習するものです。

学習内容は同じですが、基礎的・基本的内容に多くの時間を費やして学ぶ基礎クラス（B組）、発展的・応用的な内容や練習問題などを多く扱う応用クラス（C組）、その中間的な基礎クラス（A組）の3クラスとし、学習の深度に違いをもちています。

クラスの選択は生徒が行い、クラスの変更は単元毎に行います。

同一時限の学習内容は・学習の進度はいずれのクラスも同じとします。

定期テストは3クラスとも同じ問題とし、評価・評定は学年全体で行います。

授業は3クラスとも共通の学習プリントを使用し、取り扱う内容は3クラスとも同様に、A組、B組の基礎クラスでは特に配慮を要する生徒への支援を、また、C組の応用クラスでは、先に進む生徒への指導の留意点を、担当教師で話し合って検討を重ね、授業を組み立てます。

C組の応用クラスの進度が早い分は、基礎の定着や発展的な学習の時間として、別プリントを用意し、実力をさらに高める指導を行っています。

習熟度別に同一教材を使った授業を行うとき、生徒の活動や発問、指示等はほぼ同じですが、指導上の配慮と支援を要する生徒への手立ては個に応じてします。

3 評価・評定で考慮したこと

（1）評価の視点

各教科の基礎・基本にあたる内容を生徒一人ひとりが十分に習得し、それをもとに自ら考え、自ら学ぶ「確かな学力」が身に付いたかどうか。

評価した結果、十分に成果が上がっていなければ、指導のやり直し（補充指導）や、指導の軌道修正を図ります。

（2）授業での取り組み状況

基礎基本の習得（学習プリント、単元のまとめ、単元テスト）

作品づくり（集中力、持続力、発想力、独創力、創造力、工夫）

様相（関心、意欲、態度、取組、観察力）

発言（理解能力、発表能力、挙手）

内容分析（発表、課題、感想文、作文、俳句、意見文、生活文、詩、短歌、技能、挙手、



実技、歌唱、活動、ノート、ワーク、レポート、テキスト、コミュニケーション能力など)

(3) 定期テストと各種テスト(小テスト等)

定期テスト・単元テストでは進度を合わせ、テストも共通のものとししました。そのため、評価も学年全体で行い、評価のための基礎資料となる授業での取り組み状況(上記の項目等)も各教科で共通になるように配慮しました。

上記三点を重視しながら、主に四つの観点(関心・意欲・態度 思考・判断 技能・表現 知識・理解)から総合的に評価しています。



4 成果と課題

<成果らしいこと>

生徒の授業への集中度が高まった気がする。

生徒のレベルが同程度なので指導内容を絞り込みやすい。

発言の少なかった生徒が発言するようになった。

「生徒への支援と評価」、「数学の学習の仕方、効果的な指導」、

「生徒の向上心の高揚」、「自己表現の場面が増加」、「気軽な気持ちで質問が可能」等を感じることができた。

環境面では、教室がゆったりと使えて良い、机間指導も大変しやすくなった。

教師間で、進度・内容・生徒についての情報交換が頻繁に行うようになった。

評価の機会や場を増やすことで、生徒のいろいろな個性や良さを捉え、学力の伸長や定着、関心・意欲・態度の向上につながったような気がする。

評価をもとに、教師は、基礎基本の定着の様子を捉え、よりよい指導方法のあり方や授業の改善に向けて努力している。

<課題>

学習内容、学習進度を同じとしたことが果たして妥当であったか。

同一教材を基本にしていることから、生徒の習熟度に応じた学習内容や、生徒の考えを大切に授業展開については今後も研究が必要である。

進度を合わせる必要のあるテスト前や、新しい単元に入るときに、応用クラスでは足踏みをして授業が進められないことや、基礎クラスでは練習問題にじっくりと時間がかけられないことがあったり、取り扱う内容やその深さまで、年間計画で位置付ける必要がある。

応用クラスは階の違う視聴覚室まで移動しなければならない。また、ホワイトボードを使用することから、書きにくい、グラフ黒板が使いづらいことがあり、環境面においては普通教室を使つての授業が理想である。

習熟の程度に応じた指導の方が個に応じた指導がしやすいが、それでもなお、時間をかけて指導する必要がある生徒と、そうでない生徒が同一学級にいる。数学の場合は、特に時間がかかる。

クラスの入替えをする際、両クラスの進度調整が必要となる。その際、理解の早い生徒がどんどん先に進むことができず、足踏みする事がある。

クラスの入替えを頻繁に行えば、応用クラスを目指す生徒には励みになるが、基礎クラスへ入れ替わった生徒へは心のケアが必要である。

生徒へのアンケート調査より (2回目のクラス替え後(9月)に、実施したアンケート調査)

A 大変そう思う B まあまあそう思う C あまりそう思わない D 全然そう思わない

